

広島大学学術情報リポジトリ
Hiroshima University Institutional Repository

Title	擬作詩としての明の張楷「和唐詩」
Author(s)	鈴木, 敏雄
Citation	中國中世文學研究 , 66 : 21 - 34
Issue Date	2015-09-28
DOI	
Self DOI	
URL	https://ir.lib.hiroshima-u.ac.jp/00042521
Right	
Relation	



擬作詩としての明の張楷「和唐詩」

鈴木敏雄

一 序言

清の汪師韓（一七〇七〜？、雍正十一（一七三三）年癸丑の進士）は、その論著『雜擬雜詩之別』（『詩學纂聞』所収）に於いて擬作詩（模倣詩）を史的に概観し、その中で、明代に「擬唐詩」が出現し、ついで「和唐詩」が出現した事について、次のように述べている。

……錢希白作「擬唐詩」百篇、自序曰、「今之所擬、不獨其詞、至於題目、豈欲拋離本集。或有事迹、斯亦見之本傳。」然僅於『許顥詩話』見其「擬張籍上裴晉公」及「擬盧仝」二詩、顥謂「擬古當如此相似方可傳。」餘詩未之見也。……至如高彥恢「擬唐」諸作、雖云得聲調而遺神明、不可謂非古人之用心矣。乃若永樂間慈谿張楷式之有「和唐集」、『竹垞詩話』謂「不獨律詩踵韻、至歌行古風并上句亦和之。同時餘姚陳贄維誠亦然。」其集未見、然觀竹垞謂「人雖至愚、不愚於此。」則夫塵容俗狀、又不可不知所戒也（又弘治中吳江崔激淵甫有「和唐詩」三百七十餘首）。

（……錢希白「擬唐詩」百篇を作り、自ら序して曰く、「今の擬する所は、独り其の詞のみならず、題目に至つても、豈に本集を拋離せんと欲せんや。或は事迹有れば、斯ち亦た之を本伝に見る」と。然れども僅かに『許顥詩話』に於いて其の「擬張籍上裴晉公」及び「擬盧仝」の二詩を見るのみにして、顥「擬古は当に此のごとく相似て方に伝ふべし」と謂ふも、餘の詩は未だ之を見ざるなり。……高彥恢の「擬唐」の諸作のごとくに至つては、声調を得て神明を遺ると云ふと雖も、古人の用心に非ずと謂ふべからず』。乃ち永樂の間の慈谿の張楷式之に『和唐集』有るがごときは、『竹垞詩話』に「独り律詩の韻を踵ぐのみならず、歌行古風に至つても并せて上句も亦た之に和す。同時の餘姚の陳贄維誠も亦た然り」と謂ふ。其の集未だ見ざるも、然れども竹垞の「人は至つて愚なりと雖も、此より愚ならず。」と謂ふを觀れば、則ち夫の塵容俗狀は、戒むる所なるを知らざるべからざるなり（又た弘治中の吳江の崔激淵甫にも「和唐詩」三百七十餘首有り）。

この中で汪師韓は、「和唐詩」を物した詩人として明の張楷（一三九九〜一四六〇、字は式之、江寧府慈谿あるいは四明の人、中丞を拝せらるる²⁾）らを挙げ、その作を「塵容俗狀」であり、「愚」である、と評している³⁾。その際、「張楷式之有『和唐集』」以下の部分は、朱彝尊（一六二九〜一七〇九、字は竹垞）『靜志居詩話』（『明詩綜』引）の次の部分に依拠する。

中丞「和唐」、不獨律詩踵韻而已、至歌行古風并上句亦和之。同時餘姚陳贄維誠亦然。登黃鶴者必廢崔顥之章、宴滕王者必仿子安之體。人雖至愚、不愚於此矣。其在閩提督軍務、「除夕作」詩云「亂離何處覓屠蘇、濁酒三杯也勝無。」又云「除夜不須燒爆竹、四山烽火照人紅。」（「除夕作」詩）爲言者所劾而罷、此殆非和韻詩宜。其中禍後、舍和韻、不復作也。

（中丞の「和唐」は、独り律詩の韻を踵ぐのみならず、歌行古風并びに上句に至つても亦た之に和す。同時の餘姚の陳贄維誠も亦た然り。黃鶴に登る者は必ず崔顥の章に廢ぎ、滕王に宴する者は必ず子安の体に仿ふ。人は至つて愚なりと雖も、此れより愚ならず。其れ閩の提督の軍務に在るに、「除夕の作」詩に云ふ「亂離何れの処か屠蘇を覓めん、濁酒三杯また無きに勝れり」と。又た云ふ「除夜爆竹を焼くを須めず、四山の烽火人を照らして紅し」（「除夕作」

詩）と。言ふ者の効する所と爲つて罷む、此れ殆ど和韻詩の宜しきに非ず。其れ禍に中りての後、和韻を捨てて、復たとは作らざるなり。）

ここで朱彝尊は更に、元の楊士弘（字は伯謙）『唐音』⁴⁾所収の唐詩各首に和韻した張楷らの「和唐詩」について「此殆非和韻詩宜」と言い、その批判の理由として、一、和すの際、初二句の下句末の韻字のみならず、上句末の字も踏襲している、二、旅先で黃鶴樓に登れば必ず王勃の「滕王閣」詩に和すという、いわば月並み化が見られる、三、中丞（都御史）として閩中（福建）の乱の平定に当たつていながら、戦火を除夜の爆竹に見立てるような不謹慎（「不可不慎」）とも言える内容を詠んでいる、の三点を挙げる。（これら指摘のうちの三つ目は、後述するように、張楷が軍務中に「耽詩玩寇」の行為を行つたとして弾劾され、辞職に追い込まれるもともなっている⁵⁾。）

すなわち、冒頭に挙げた汪師韓の張楷ら「和唐詩」に対する評価は、これら朱竹垞の指摘を承け、その「容・状」を「塵・俗」であり「愚」であると評していることになる。張楷らの「和唐詩」は、擬作詩史上に在つては、心のこもらない、形骸化したものとなつているとの指摘を受けているものと思われる。

そして更に清代の文学史家としての汪師韓は、この朱

竹垞の否定的な見解を承け、あたかも擬作詩というジャンルが明代の「和唐詩」形態に至って末期的な症状を呈したかのような論調を用い、自らの構想する、六朝時代から始まる擬作詩史「雜擬雜詩之別」を締め括っている。

本稿ではその汪師韓の取り上げている、いわば擬作詩史の今後に影を落としてしまっているかに言われている張楷らの「和唐詩」について、寧ろその可能性のほどを、それが「擬作詩」でもあるという観点から、今一度見ておきたいと思う⁶⁾。

なお、朱竹垞および汪師韓が「同時餘姚陳贇維誠亦然」と言っている所の、張楷と同様に元の楊士弘『唐音』に和韻した陳贇（字は維誠）の「和『唐音』」については、ここでは考察を省くが、明の曹學佺『石倉歷代詩選』卷三百八十四（明詩次集十八）の採録数が張楷を凌いで一百九十一首にも上っていることから、今後の考察が俟たれること、ここに付記しておきたい。

二 張楷伝

張楷という人の伝については、「明史」には掲載されていないものの、明の李賢の「張公神道碑銘」および呂原の「張公墓誌銘」に、張楷の「公の生まるるは洪武戊寅三月二十二日を以てし、而して其の卒するは天順庚辰十一月七日と為す、享年六十有三なり」の間の詳細な行状が記されており、また『明史紀事本末』には上命を受けて浙閩の盜（鄧茂七、葉宗留ら）の乱等を平定した事蹟

も詳しく記されているので、伝記の概ねは知ることが出来る。さらに、『浙江通志』には、清の湯斌（一六二七～一六八七）により「張楷伝」のあらましが綴られている。

これらに拠れば、張楷は永樂二十二年（甲辰、一四二四）年の進士で、宣德二（一四二七）年には命を奉じて閩中車騎を督し、北征に従い、期に先んじて集合して江西道監察御史を拝するに至っている。正統十三（戊辰、一四四八）年秋九月、左僉都御史に拔擢され、閩（福建）の鄧茂七および処州の葉宗留らの叛乱を平討している（平浙閩盜）。景泰元（一四五〇）年に朝廷に呼び戻され、天順三（一四五九）年には、南京右僉都御史となっている。天順四（一四六〇）年朝廷に賀に入った際、京で卒したとある（張楷の墓は、『嘉靖寧波府志』に依れば、蔡家山に在るといふ）。

また、張楷の為人は坦夷濶達で、善く賢者を推轂し用いたので、至る所で成功している、という。その学は、經史から天文、医卜に至るまで、通曉せざる無く、文には古法有り、書は行草篆隸が上手く、詩に尤も耽り、未だ嘗て一日として吟咏を廢することなく、晋唐人の風が有った、という⁷⁾。

著作としては、『千頃堂書目』⁸⁾や『浙江通志』に、「陝西紀行集」「輕侯集」「介庵集」「歸田錄」「南臺稿」「百琴操」「效顰稿」「和選詩」「和李謫仙樂府古詩杜少陵七言律十二卷」「和唐詩正音二十八卷」「和許渾丁卯集」「和高季迪缶鳴集」「和中峯和尚梅花咏（梅花百咏）」、その

他、「四經糠粃（一作稂秕、又作四書糠粃）」（佚、未見）「大明律解」（大明律條）「律條撮要」「撮要武經」「小學增廣事物紀原」「孔子聖跡圖贊」等が挙げられている。

なお、これら著作のうち「和選詩」から「和中峯和尚梅花咏（梅花百咏）」までは全て所謂「和詩」であって、張楷の神道碑や墓誌銘に「公悉和之、累數百卷。皆豪贍壯麗、海内之士、莫不口服（一作腴）而心悅之。外國亦市其集、而慕其風采」（公悉く之に和し、累ねて百卷を數ふ。皆豪贍壯麗、海内の士、口服して心に之を悦ばざる莫し。外國も亦た其の集を市ひ、而して其の風采を慕ふ）「海内之士皆耳熟其名、而朝鮮來使往往市其『和唐音』以歸」（海内の士皆耳に其の名に熟し、而して朝鮮の來使往々にして其の『和唐音』を市ひて以て帰る）と言われるように、張楷はそれを得意とし、海外からの使者も來朝して入手を望んだようである。張楷の「和詩」に対する当時の評価は、高かったものと考えられる。

さらに、すでに触れておいたように、「景泰改元（一四五〇）年、公班師至京、有妬其功者、劾公、初至耽詩玩寇以罪、罷歸。」（張公神道碑銘）とあり、朱彝尊も「其在閩提督軍務、『除夕作』詩云『亂離何處覓屠蘇、濁酒三杯也勝無』。又云『除夜不須燒爆竹、四山烽火照人紅』（除夕作）詩」。爲言者所劾而罷、此殆非和韻詩宜、其中禍後、舍和韻、不復作也。」とそれを踏まえて評しているように、軍務中に行なった「耽詩玩寇」行為のために弾劾され、罪を得ている（手柄に対する嫉妬とも）。このことから

逆に、張楷が軍務や職務で各地を征旅する際にも、詩跡に在れば歌枕的に「和唐」に耽っていたであろうことが推測できる。弾劾され辭職に追い込まれたとは言え、寧ろそういう形で作詩に耽溺する活動を行い、実績を上げていたであろうことが知られる所でもある。それはそのまま張楷という詩人の特徴ともなっているのではないか。

三 明代に於ける張楷の評価

では、張楷の伝と併せて、清の朱彝尊や汪師韓以前の明代、張楷在世当時の張楷の詩作に対する評価は、具体的にはどのようなものであったのだろうか。

張楷と同時代の張洪（字は宗海、常熟の人）は、楊士弘『唐音』に和した張楷の和韻詩集『和唐詩正音』に序を寄せ（正統二年、一四三七年）、次のように言う。

襄城楊士弘集『唐音』行於世、……監察御史張楷式之、學優德贍、心平氣和、將托聲詩以觀己志、摘『唐音』中律詩絕句、盡和之。里生錢昌録以示余、三復之餘、得其詞意。即予所謂「辭氣渾厚、不求奇巧、自然難及」者也。上無六朝氣習、下無晚唐流麗、得正音之體製者也。凡予致思而未得者、皆能洞發其微、出以己之志意、酬酢盛唐諸名公、雖不能一一模範、而要之自然、一家之言可尚也。已若欲刻意求工、則不出於自得也。……

（襄城の楊士弘集『唐音』世に行はる、……監察

御史の張楷式之、学優れ徳贍り、心平らかにして氣和やか、將に声詩に托して以て己が志を觀しめさんとし、『唐音』中の律詩絶句を摘んで、尽く之に和す。里生の錢昌録して以て余に示せば、三復の餘、其の詞意を得たり。即ち予の所謂「辭氣渾厚にして、奇巧なるを求めず、自然にして及び難き」者なり。上に六朝の氣習無く、下に晩唐の流麗無く、正音の體製を得たる者なり。凡て予の思ひを致すも未だ得ざる者にして、皆能く其の微を洞發し、出だすに己の志意を以てし、盛唐の諸名公に酬酢し、一々模範する能はずと雖も、而も之を要するに自然なれば、一家の言は尚ぶべきなり。已に若し刻意して工みなるを求めんと欲せば、則ち自得を出でざるなり。……明、葉盛撰『水東日記』所収『和唐詩正音』序）

張洪はこの序に於いて、唐詩を初唐の「始音」、盛唐の「正音」、晩唐の「遺響」の三等に分け、初唐のものは六朝の氣習が遺り、晩唐のものは奇なるを巧んでいて、語が難しいわりに意は浅く、盛唐のもののみが奇なるを巧まず、自然で、言葉も氣も厚みが有り、まさしく「正音」と言うにふさわしい、と言う。

しかし当時、和唐する者は、律詩ならばその「正音」の厚みを貴ばんとして、奇なるを巧んで却って流麗に失してしまい、絶句ならばその「正音」の文字数の少なさにも増して意の多さを貴ばんとして、却って浅くなり粗

忽粗略になつてしまい、結局、浅いか深いか、言っていることが正しいか間違っているかの違いしか感じられなくなる、と続ける。

そして、ただ張楷の「和唐詩」だけが「六朝の氣習」を遺さず、「晩唐の流麗さ」に陥ることも無く、言葉も氣も厚く、奇なるを巧まず、「將に声詩に托して以て己が志を觀しめさんとし」、自然で、もっぱら盛唐の「正音」の純粹な風格、體裁を保っている、とする。そしてそれはどのようにして可能となつているのかと言えば、奇なるを巧めば浅くなり、独りよがり以上のものは出来ない所を、張楷は巧むことなく、自身がもともと盛唐諸士の氣を備えている上に、盛唐の諸名士の「正音」を深く發微し、酬酢（和唐）する際には「出だすに己が志意を以てす」ということをしているからである、と結論づける。

この張洪の序は、逆に張楷が「己が志（志意）」を持っているとは言え、いまだそれを表出するこれと言った表現を持ち得ず、いわば日常の中に「己が志」を散在させたままであつた所を、和唐することにより、その「己が志」が『唐音』所載の唐詩の韻の齎す論理構造を入手でき、日常の「自得」以上に己れの意図する「志」に糾合でき、これぞと思う自己表出が出来るようになったことをもの語っている、とも言えるのではないか。そして、このことが当時の張楷（および陳贄）らの和唐という營為の価値を擬作詩史上に位置づけているものと考ええる。

四 次韻は「先後易ふる無し」

朱竹垞（および汪師韓）は、既述したように、張楷の「和唐詩」を「此殆非和韻詩宜」と評した際、その理由の一つに「登黃鶴者必廣崔顥之章、宴滕王者必仿子安之體。人雖至愚、不愚於此矣。」を挙げていた。それはその詩跡（歌枕的な詩の地理）に反応する習慣化された機械的な營為に見える点を批判したものと思われる。黃鶴樓や滕王閣ではないが、松江に独り宿つた際、劉長卿に和した以下のような詠が有る。

松江獨宿	劉長卿
洞庭初下葉	洞庭初めて葉を下し ^①
孤客不勝愁	孤客は愁ふるに勝へず
明月天涯夜	明月天涯の夜
青山江上秋	青山江上の秋
一官成白首	一官白首と成れば
萬里寄滄洲	萬里滄洲に寄せん
久被浮名繫	久しく浮名に繫がるれば
能無愧海鷗	能く海鷗に愧づる無からんや

松江獨宿和唐人韻	張楷
吳江楓葉冷	吳江楓葉冷かなれば
獨客漫多愁	獨客漫りに愁ひ多し
月落汀烟曉	月落ちて汀煙明け
天晴海氣秋	天晴れて海氣は秋なり

萍踪隨雁鷺	萍踪は雁の鷺ぶに随ひ
鄉夢越汀洲	鄉夢は汀洲を越ゆ
回首青雲路	首を回らず青雲の路
低頭愧白鷗	頭を低れて白鷗に愧づ

詩跡にもなつてゐる華亭のある松江に独り宿れば必ずこのような作を詠むのが当時の常套となつていて、張楷もその慣習に倣つただけであるなら、確かに「愚」であるかも知れない。

しかし改めて張楷在世当時の評価に遡り、張洪『和唐詩正音』序が指摘していたように、張楷自身が（唐の「正音」を入手できて）「將に声詩に托して以て己が志を觀しめさんとし」「出だすに己が志意を以てす」、すなわち未だ表現を持たない「己が志」を、劉長卿の原唱に托して意味ある表現に糾合しようとしたのであれば、「塵容俗状」と一蹴する前に、自己表現の一つの在り方として、擬作詩史上に於いては、一考の余地が残っているのではないか。

そもそも「和韻」（賡和）詩は、単に「韻」の音声を継いでいるだけではない。北宋の劉攽（一〇二二〜一〇八九、字は貢父）が「唐詩賡和、有次韻（先後無易）、有依韻（同在一韻）、有用韻（用彼韻不必次）、今人多不曉」（『中山詩話』）と言うように、和韻詩の「次韻」、「依韻」、「用韻」の三つの型のうち、張楷らが試みているような「和唐」詩すなわち「次韻」詩は、「先後易ふる無し」と

いう形を持ち、「依韻」、「用韻」とは異なっており、韻を踏む「先後」すなわち原唱の韻字の順序そのままが重んじられる。

それは、この「松江独宿」詩を例に挙げるならば、韻の音声に伴う「愁ふなり」「秋なり」「洲なり」「鷗なり」という意味の響きの順序の構築する論理こそが意味を担っていて、それが「松江」詠という歌枕的な詩跡を世に出していることにもなる。「次韻」形式によって和唐し、自己表現に繋げる者は、その点を重視し、自らの「志意」を托そうとする。

張楷は詩跡である松江¹⁰を独り旅し、寂しい宿をとっている。その際、旅人の常として取り留めもない「愁ひ」が湧き起こる。それを張楷は自らにとつて意味ある思いに糾合しようとし、先賢である劉長卿がすでにそれを行なっていることに思い至る。「愁ひ」に襲われたのは劉長卿と同じく「秋」だからでもあろうが、眼前には我が人生の現今を映す松江の「洲」が見渡せ、それをじつと眺めやると、劉長卿が自ら帰すべき仙境「滄洲」が思い浮かんだのと同様、やはり今や人生の潮時、自分を故郷に帰そうとする夢が「洲」を越えて、そこまで追つて来ている、という己が意の存在に気づく。そしてそれが「愁ひ」に襲われた要因であると知る。それならばやはり劉長卿が思ったように、自らのような「愁ひ」を既に解消できている松江の「洲」の「鷗」に対して合わせる顔が無い。我が青雲の路は実は「萍踪の雁の驚ぶに随ふ」、

張楷がまず「律詩」に於いて「和『唐音』」を試みたのは、恐らく、律詩こそ論理構成が捉え易いことに因るのではないか。文字数の少ない絶句の起承転結よりも、今少し、ある程度の長さ（厚み）があるからこそ、欲しい論理構成も見えてくる。張洪『『和唐詩正音』序』が「律詩は『唐詩正音』の厚みを貴び、……絶句は字は少なくとも『唐詩正音』の意の多さを貴ぶ」という言い方で触れた所と関連しよう¹¹。

晩次樂郷縣

陳子昂

故郷杳無際 故郷は杳として際無く

日暮且孤征 日暮れ且つ孤り征く

川原迷舊國 川原は旧國を迷はしめ

道路入邊城 道路は辺城に入る

野戍荒煙斷 野戍は荒煙断ち

深山古木平 深山は古木平らかなり¹²

如何此時恨 如何せん此の時の恨み

嗷嗷夜猿鳴 嗷々として夜猿鳴くを

晩次樂郷縣

張楷

故國一千里 故國は一千里

他郷此獨征 他郷此に独り征く

亂山依遠戍 亂山は遠戍に依り

寒日下孤城 寒日は孤城に下る

燈火瞻程遠 燈火程を瞻れば遠く

流れに漂う浮き草の如きものであることを知られないうちに帰るべき処に帰ろう、との論理が張楷自身に齎され、その「志（志意）」が意味あるものとして表出されることになる。

そのような、韻の順序の構築する論理に「己が志」を托し得たことが、「和『唐音』」すなわち「次韻」（「和韻」という營為に価値を付与しているのであるとすれば、詩跡に機械的に反応する常套の慣習に従っただけというのではなく、張楷は旅という自らの日常に散在している諸々の思いを、劉長卿が構築した論理に托すことによって、旅に関する自身の「志（志意）」として初めて意味あるものにしたことになる。であるからこそ張楷『和唐集』『和唐詩正音』は国外にまで知られていったのではないかと。擬作詩史上への位置づけが、そこに可能となるように思われる。（因みに、陳贄にも同和韻詩「松江獨宿」がある。）

五 張楷の次韻詩

以下、張楷が『和唐音』『和唐詩正音』に於いて「次韻」形式を用い最初に唱和したという「律詩」（五律）の何篇かに当たり、韻字の順序が構築する論理に重点を置きつつ、張楷が原唱に托し、散在する己が「志意」を意味ある表現に糾合しようとした（将に声詩に托して以て己が志を觀さんとし、「出だすに己が志意を以てし」、「正音」の「体製」となり得ている）具体例を、幾つか見えておきたい¹³。

川原入望平

川原望めに入りて平らかなり

不堪回首處

堪えざらん首を回らすの処

孤雁入雲鳴

孤雁雲に入りて鳴くに

孤独な旅に在って荒涼たる古戰場跡の遺る古城に宿る際に起こる寂寥感を、意味ある表現に糾合せたく思いつつ、それを散在させるのみであった張楷は、三国時代、呉の陸抗が晋の羊祜と対峙した荊州¹⁴へ旅した際に（あるいは机上かも知れないが）、陳子昂の「樂郷県」詠が持つ「征くなり」「城なり」「平らかなり」「鳴くなり・鳴るなり」という韻の順序によって、故郷とは異なる他郷の古城の模糊とした光景と時の流れの齎す、身に迫る寂寥感を増幅させる論理構成に思い至り、それに擬することにより（初句の「際」は踏み落とされている）、これまで得られなかった、旧國に戻られなくなっている模糊とした自らを認めざるを得ない、意味ある寂寥感を表出するに至っている。それこそが張楷（や陳贄）らにとつて「己が志」を托せる表現ということになるのではないか。（因みに、陳贄にも同和韻詩「晩次樂郷縣」がある。）

遊少林寺

沈佺期

長歌遊寶地 長歌して宝地に遊び

徙倚對珠林 徙倚として珠林に対す

雁塔風霜古 雁塔は風霜古り

龍池歲月深 龍池は歲月深し

紺園澄夕霽
碧殿下秋陰
歸路煙霞晚
山蟬處處吟

紺園は夕霽澄み
碧殿は秋陰下る
歸路は煙霞晚れ
山蟬処々に吟ず

遊少林寺
步入金沙地
相邀坐竹林
僧歸青嶂寂
龍臥碧潭深
石澗流春乳
松堂落午陰
高懷殊未已
臨別更沈吟

張楷
歩して入る金沙の地
相邀へて竹林に坐す
僧歸すれば青嶂寂かに
龍臥すれば碧潭深し
石澗は春乳流れ
松堂は午陰を落とす
高懷殊に未だ已まず
別れに臨んでは更に沈吟す

禅の聖地を訪れた際の感懷を詠もうとしつつ、これまではそれを散在させていた張楷は、少林寺に遊んだ際、沈佺期の「遊少林寺」詠の、「地なり」「林なり」「深きなり」「陰るなり」「吟ずるなり」という韻の構成する、聖地の境内の到る処に深遠な趣きを湛える様を詠む論理に思い至り、それに擬することにより、森厳さの中を訪れると心洗われ、いつまでも立ち去り難く、教えの乳味を詩に吟じたくなるという、己が志の活きる表現に糾合し得ていると思われる。(因みに、陳贄および同時の明人邵寶にも沈に和した同韻詩「遊少林寺」がある。)

楚江(長江)に臨む古都の雨の中を知人が旅立つに際し、そのような別れに対して起こる重苦しい情を、これまでは言わばこれと言った表現に表していなかった張楷は、韋應物の雨天の夕暮れ時の長江に臨む古都「建業」詠の、「時なり」「遅きなり」「滋きなり」「絲なり」という韻の順序の構成する、雨を帯びた夕景色の重苦しさを描く論理に思い至り(初句の和韻「裏」は、張楷は自ら原則に背き、踏み落としている)、それに擬することに、より、重苦しく暮れゆく江や山の、帰りを急ぐ雁や動きの遅い雲に、老けるといふ自らの時間感覚に基づく別離の情を托し、意味ある表現を獲得するに至っている。

送人遊塞
初晴天墮絲
晚色上春枝
城下路分處
邊頭人去時
停車數行日
勸酒問回期
亦是茫茫客
還從此別離

王建
初めて晴る天墮の絲
晚色春枝に上る
城下路分かるるの処
辺頭人去るの時
車を停めて行く日を数へ
酒を勧めて回る期を問ふ
亦た是れ茫茫たる客
還た此れより別離す

送人遊塞
別淚墮如絲
含情折柳枝

張楷
別淚墮つること絲のごとく
情を含んで柳枝を折る

なお、戴叔倫にも同次韻の「遊少林寺」詩があり^[15]、張楷および陳贄ともにそれをも参照していることは分かるが、初句を押韻せず、また『唐音』も戴叔倫の詠は採っていないので、沈佺期に和していると見て好い。

賦得暮雨送李胄
楚江微雨裏
建業暮鐘時
漠漠帆來重
冥冥鳥去遲
海門深不見
浦樹遠含滋
相送情無限
沾襟比散絲

韋應物
楚江は微雨の裏
建業は暮鐘の時
漠々として帆来たること重く
冥々として鳥去ること遅し^[16]
海門は深くして見えず
浦樹は遠くして滋ひを含む
相送れば情は限り無く
襟を沾らすこと散絲に比したり

賦得暮雨送李胄
微雨滄波路
孤舟薄暮時
雁迷歸浦早
雲濕度江遲
白日青山暝
芳洲碧草滋
紛紛對華髮
相看總成絲

張楷
微雨滄波の路
孤舟薄暮の時
雁は迷へば浦に帰ること早く
雲は湿れば江を度ること遅し
白日青山暝れ
芳洲碧草滋る
紛々として華髮に対し(對一作到)
相看れば総て絲と成る

晚風花落處
寒日馬嘶時
記里知前路
占程定後期
百年能幾日
強半惜分離

晚風花落つるの処
寒日馬嘶くの時
里を記せば前路を知り
程を占へば後期を定む
百年能く幾日ぞ
強半は惜しむ分かれ離るるを

遠く辺塞に征く者との別離に際しての送別の辞としては、これまでは殊さらこれと言った表現を持ち得なかった張楷は、王建の「辺塞」詩の「絲なり」「枝なり」「時なり」「期なり・期するなり」「離るるなり」という韻の構成する、分かれに際しては、旅は何日間なのか、いつ帰って来られるのかという問いを發して隔絶感を訴える論理に思い至り、それに擬することにより、日程のみならず旅程をも問えば人生の大半は離別と分かるという、張楷独自の「己が志意」を表出する意味ある表現を得るに至っているのではないか。

贈張將軍
寥落軍城暮
重行反照間
鼓聲經雨暗
士馬過秋閑
慣守臨邊郡
曾營海上山

耿漳
寥落たり軍城の暮
重ねて行く反照の間
鼓聲雨を經て暗く
士馬は秋を過ぎて閑かなり
守るに慣る辺に臨むの郡
曾ては海上の山に営む

關西舊業在 關西には旧業在り
夜夜夢中還 夜々夢中に還る

贈張將軍 張楷
百戰功何在 百戰功は何くにか在る
荒城夕照間 荒城夕照の間
角聲千騎盡 角声千騎尽き
弓影一燈閑 弓影一燈閑かなり
見月思臨塞 月を見ては塞に臨むを思ひ
因風想出山 風に因つては山を出づるを想ふ
當年青海上 当年は青海の上り
猶記突圍還 猶ほ記す圍ひを突いて還るを

辺城を守る將軍^①に寄せる言葉としては、これまでは並一通りの表現であつた所を、耿津の「辺城」詠の「間なり」「閑かなり」「山なり」「還るなり」という韻の構成する、辺城を準備しつつも、戦い済んで我に返り、さらには重責を自覚しつつも、本来の自分を夢に省みる將軍像を描き出す論理に思い至り、それに擬することにより（一句目の「暮」は踏み外し）、辺將として、夢ではない帰還を記銘することをこそ願うという言葉贈るのが好いと、「己が志」に基づく表現に糾合できている。

この和詩は、或いは都御史として軍を率い、閩浙を平討した張楷みずからの在り方をも意味づけしようとしているようにも思える。

その「声調」と「神明」とが「古人」すなわち模倣対象の用い方と同じであるか否かに在ると言う。

そして更にその様に定義した上で、「雜擬」詩の進化形である張楷の「和唐詩」を、明の高（彦恢）の「神明」はともかくも唐の「声調」を得てゐるとする「擬唐詩」（例えば「擬岑補闕參奉和早朝大明宮之作」や「擬高常侍適送王李二少府貶衡巫」詩）と比較し、朱彝尊の評語を借りて、既に冒頭に述べたように、「声調」も「神明」も「塵容俗状」であり（恐らくは次韻は「先後易ふる無し」であることから、「意調への規模」の度が過ぎていかに見えるのではないか）、もはや「古人の用心」ではないと評する。

しかし、これも前述したように、汪師韓ら清人に先立つ明の張洪らは、張楷の取り組みを寧ろ高く評価し、張楷の「和唐詩」は「もつぱら盛唐の『正音』の純粹な体裁、風格となり得ている」（『和唐詩正音』序）と評している。「声調」「神明」が古人と同じであると言っていることになる。

また同じく明の楊榮も「題張御史『和唐詩』後」に於いて、次のように言う。

……夫詩自三百篇以來、而聲律之作始、盛於唐開元天寶之際。伯謙所選（『唐音』）、蓋以其有得於風雅之餘、騷些之變。楷（張楷）取而和之、其殆究夫伯謙所選之意、與唐人所作之旨矣。不然、奚其好之

以上、これらも「己が志を觀さん」とし、『唐音』の論理に托することにより始めて得られた、勿論似てはいるが、それでも張楷（や陳贄）独自の表現であると考えても好いのではないか。

六 結語

和詩も擬古詩であるとの観点から見ると、張楷ら明の「和唐詩」作家は、唐人の「韻」の意味の響きの構築する論理構成に擬することによって、それに自らの散在する（未だ表現を持たない）「志意」を托し、自己を表出する意味ある論理構築を成し遂げていると思われる点に、擬作詩史上の価値が見出される。

詩跡（歌枕）との出会いによって、反射的に対応し、その場の即興によって唐人の韻を弄し、形骸化した詠を物しているのではないと考えたい。

汪師韓は「雜擬雜詩之別」に於いて「雜擬」詩を「雜詩」と比べ、その特質を明らかにした上で、「古詩十九首」や蘇武・李陵の古詩、および「詠懷」、「詠史」、「七哀」、「百一」、「感遇」、「遊仙」、「招隱」等の徒詩を「雜詩」と言うのに対し、「取往古名篇、規模其意調」（往古の名篇を取つて、其の意調に規模する）ところの「擬古」、「倣古」等の擬詩を「雜擬」と言う定義し、「規模」すなわち古人への模倣によって始めて成立するジャンルであるとする。

そして、その「雜擬」すなわち諸々の擬作詩の成否は、

之篤也。嗚呼詩豈易言哉、本諸性情沛然流出胸次、而無雕刻鍛鍊之跡者、斯造其妙。……

（……）夫れ詩は三百篇より以て來のかた声律の作始まり、唐の開元天寶の際に盛んなり。伯謙の選する所（『唐音』）は、蓋し其れ風雅の餘、騷些の変を得る有るを以てせん。楷（張楷）取りて之に和し、其れ殆ど夫の伯謙の選する所の意と、唐人の作る所の旨とを究めり。然らずんば、奚ぞ其れ之を好くするの篤きならんや。ああ詩は豈に言ひ易からんや、諸れを性情に本づきて沛然として胸次を流出し、而して雕刻鍛鍊の跡無き者にして、斯ち其の妙に造る。……）

張楷は、詩人として唐の詩人の「旨」を体得し、それに自らの「胸次」を出してもいると言う。元の楊士弘が『唐音』を編んだことに因り、「旨」の明らかな唐の詩群が張楷に齎され、それらの韻の紡ぐ論理構成を模倣することにより、自らの普段の胸中も意味ある形で表出できるようにになっている。

それは汪師韓の語を逆に借りれば、張楷らの「和唐詩」もやはり唐人の「神明」と「声調」とが「古人の用心」であり、「往古の名篇」に「規模」出来ていると言っていることにならないか。

注

[1]『靜志居詩話』には、「廷禮『擬唐』如薛稷鍾紹京之雙鶴、終下真蹟一等。五古若『長空一飛鷹、落日千里至。夜色不映水、微風忽吹裳。銜杯雙樹間、百里見海色。飛雨一峰來、微雲度疎竹。』不失唐人遺韻。」とある。なお、「長空一飛鷹、……は高棟『賦得客中送客』詩の「在山每送客、客行思未已。他鄉此別君、離情滿天地。」以下に続く後半。

[2]明代の「中丞」は、巡撫あるいは都御史の通称。

[3]朱彝尊『明詩綜』は、張楷の詩を三首（和韓翃漢宮曲」「和李益江南曲」「和杜牧江南春）採っているが、いずれも「和唐詩」である。また、陳贄（字は惟成）の二首（和岑參晚發五谿」「和張籍蠻中）も同様であり、それには「黄太冲云『惟成從鄉先生宋公傳・張臺民、得其詩法。評者謂、古詩逼陶柳、近體駸駸乎盛唐。』」との評価が付されている。

[4]楊士弘『唐音』の編纂に関しては、陳国球『明代復古派唐詩論研究』二〇〇七（北京大学出版社）に詳しい。

[5]不謹慎な「耽詩玩寇」行為に関しては、すでに李東陽『懷麓堂詩話』にも、「張式之爲都御史、在福建督軍務（提督八閩軍務）、作詩曰『除夜不須燒爆竹、四山烽火照人紅』、爲言者所劾而罷、詩體不可不慎也」と見える。

[6]朱彝尊『明詩綜』は更に、張楷に関して、「徐子元云、式之『和唐』、所謂服堯之服、惜其自作殊不快意」「蒋仲舒云、中丞遍和唐詩、可謂捧心效顰、究其才致、亦一時之彦也」の二つの評語を引く。張楷の「和唐詩」は、堯帝の服を着ていながら不似合いだとも思わず、顰みに倣うことに心を捧げ、当时に於いては一家言さえ立てている、と批判する。

昂詩注』一九八一（四川人民出版社）には異説に関する考察も見られる。

[15]戴叔倫「遊少林寺」詠を含む一連の「遊少林寺」詠については、植木久行『中国詩跡辞典 漢詩の歌枕』二〇一五（研文出版）に「少林寺は唐代から詩に詠まれ始めた。なかでも初唐・沈佺期の五律「遊少林寺」詩は、宮廷詩人らしい華麗な言葉織り交ぜて表現し、少林寺を詩跡化する作品となる。幽邃・清浄な古寺のたたずまいが歌われる。……中唐期、戴叔倫の作と伝える「少林寺に遊ぶ」詩は、幽深な境内を歌う」と言う。張楷らも和韻形式によってこれに続いている。

[16]周錫炎は『唐詩鑑賞辞典』一九八三（上海辞書出版社）に於いて「細雨濕帆、帆濕而重、飛鳥入雨、振翅不速。雖是寫景、但遲重二字用意精深」と言い、「遲」韻の響きに着目している。また「海門」は「海門江由此入海、故名海門云」とある。なお、陶敏ら『韋應物集校注』一九九八（上海古籍出版社）は「賦得某某送々」形式の詩は、祖とする所が有り、眼前に実在する景ではない、とする。

[17]耿漳在世中の「張將軍」は枚挙に暇が無く、將軍張某が誰なのかを今は特定できないが、唐の楊巨源「贈張將軍」詩の「張將軍」が三相張家の「張嘉貞、玄宗時以中書侍郎同平章事、子延賞、德宗朝平章事、孫弘靖、元和中平章事、時稱三相張家」と言われる張弘靖であることから、ほぼ同時代の權德輿（七五八・八一八）「送張將軍歸東都舊業」詩の「張將軍」も、洛陽に別墅旧業のあった張弘靖ではないかと推測できる。そこで、一世代前の大曆十才子のひとり錢起「送張將

[7]伝記資料としては、さらに明の童軒「哀都憲張先生（并叙）」（『清風亭稿』所収）があり、「先生張式之、四明人也、以詩大鳴于時。邇以奉表之京、遂有鼓缶之變。……」とあり、人生半ばで「鼓缶」すなわち妻を喪ったことが誌されている。

[8]『千頃堂書目』は「張楷」を作る。

[9]「洞庭」については、『唐音』注に「洞庭在蘇州府、非岳州洞庭也。」とあり、儲仲君『劉長卿詩編年箋注』一九九六（中華書局「中國古典文學基本叢書」）は「太湖」とする。

[10]『唐音』注に「松江水、自華亭流入松江、江在吳江縣、今爲松江府。」とある。なお、「華亭」は植木久行『中国詩跡辞典 漢詩の歌枕』二〇一五（研文出版）も取り上げているように、詩跡として知られる。

[11]張楷の詩作品の一部は、明の曹學佺編「石倉歷代詩選」卷三百三十五（明詩初集五十五）に、律詩を始めとして、二十首余りが収められている。

[12]明人が成熟した詩体として唐の七律を探求したことに關しては、陳国球『明代復古派唐詩論研究』二〇〇七（北京大学出版社）が論じている。

[13]領聯の「平」字の用法については、陳志明は『唐詩鑑賞辞典』一九八三（上海辞書出版社）に於いて、「煙非自斷、而是被夜色遮斷、木非眞平、而是被夜色蕩平」と言い、山の不ぞろいの木々が（宵闇が迫ることにより）曖昧に見えている貌を詠むとして、「妙筆」と評する。

[14]樂郷城は、荊州樂郷都督吳の陸抗が晋の羊祜と対峙した所（『三国志』吳志卷十三）としておきたいが、彭慶生『陳子

軍征西」詩およびこの耿漳「贈張將軍」詩の「張將軍」は、その父親の、同じく一世代前の張延賞ではないかと推測しておきたい（ただし「旧業」が別荘だとすると、関西に在りという点は合わない）。「関西」は『後漢書』虞詡傳に「諺曰『關西出將、關東出相』」とあるのを踏まえると思われるが、張延賞は文官であり、節度使としてはやがては相公と称されるはずであるので、ここは貞元元年に宰相となる前（大曆末）の西川節度使の時であると見て、その軍功を買って將軍と称されていると看做せば、耿漳の詠む「舊業」（ここは別荘ではなく本業）は関西に在りということになるのではないか。